

戸に行き、日本橋室町に進出して広く普及しました。これまでの雛に比べて顔が丸く、気品に満ちた表情で、江戸の人々の人気を集めました。

○有職雛

宝暦年間、京の公卿を中心に一部で作られたもの。公卿の装束を有職故実に基づいて人形師に作らせた人形で、明治以降この名前で呼ばれています。

○古今雛

江戸時代の代表的な雛人形。明和年間（一七六四～七一）に江戸で売り出されました。金糸や色糸を使った美しい装束とあでやかな顔が評判を呼び、江戸だけでなく、京、大坂の人々の人気を集めました。今まで墨で描いていた目に、ガラスや水晶をはめ込んだものもこのころから作られています。

ら雛道具を中心に生産が行われていたようです。ちなみに静岡産雛道具は現在、全国で九十%のシェアを誇り、年間の生産高は百五十億円に上っています。

志太の人形作り

●雛祭りと天神人形

志太地区では三月、所によっては月遅れの四月三日の節句に「天神さん」を飾る家が多くあります。この雛祭りや天神人形の関わりについて少し説明しましょう。

天神とは、平安時代の学者、菅原道真のこと。平安末期から道真は天神として恐れ、あがめられていました。また、農耕の神としても信仰を集めていました。江戸時代になると寺子屋を中心に、学問の神、書道の神として広く親しまれるようになります。

す。明治以降雛人形は、この古今雛の型を受け継いで現在に至っています。

雛人形の産地

雛祭りの広まりとともに雛人形の製作も発展していきました。情報・輸送手段の発達により、江戸時代までは消費地とその近郊で生産されていたものが、明治以降変貌を遂げていきます。

現在の産地は、関東地方と中部地方の太平洋側に集中して分布しています。東京、京都をはじめ、愛知（名古屋市）、埼玉（岩槻市・鴻巣市）、静岡などが主産地として有名です。

静岡では、徳川家康が没した後、久能山東照宮を造営するために諸国から集められた宮大工や漆工、彫刻師、指物師などが一部永住したことに始まり、江戸末期ごろからして、全国各地で土、木、練り物、張り子製など郷土色豊かな天神人形が作られるようになりました。さらに正月や三月、五月の節句に、男児の祝いとしてこれらの人形を飾る風習も生まれていきます。この人形のことを「雛天神」と呼びました。

静岡県でも雛祭りに天神人形を男の子のお雛様として飾る風習が江戸時代からあったといわれています。特に静岡県中部地方では、一番、特大、番外と呼ばれる幼児が座ったほどの大きな衣装着の天神人形を「天神さん」と呼んで飾る風習が現在もあります。

●志太土天神の誕生

江戸時代から全国各地で作られた天神人形ですが、志太地区でも幕末から明治の始めにかけて土（練り）天神（通称、志太土